

すみ文ステージ「住吉のうた」／住吉文化事業実行委員会主催
「第1部」

万葉集・古今集から——和歌に詠みこまれた住吉

「聞こう 歌おう 住吉の歌——万葉集から現代短歌まで」

鶴崎裕雄

■歌 声に出して読み上げる 美しい景色・四季の移ろい・自分の思うこと・恋心・追憶等々

現在どのようにして読み上げられているか。

正月初めのテレビ番組の朗詠

宮中での歌会始のニュース番組

実際には定まりはなく、各ごとの方法・ルール

一例、山形県高島町文殊堂奉納連歌の例↑NHK大河ドラマ「天地人」

四人の読み手、どう読もうか→各自に任す

元教員⇨詩吟調、元会社経営⇨謡、住職⇨声明、神主⇨祝詞

↓何か特徴のある節回し、大きな声、ゆったりした速さ

■歌垣 古代の人々の集まる処、野山や市で男女が歌を詠み合い自分をアピール

筑波山の歌垣

■日本の歌 倭歌 七五調・五七調

五・七・五・七・五・七……五・七・五⇨長歌

五・七・五・七・七⇨短歌

五・七・七・五・七・七⇨旋頭歌

■和歌三神 歌を守る神・歌人の信仰

住吉明神・玉津島明神・柿本人麻呂

■万葉集 住吉・住ノ江の景色、風景

白波の千重ちへに来与する 住吉の岸すみのえの黄土はにふに にはひて行かな

——車持朝臣千年（くらもちのあそみちとせ） 卷六（案内のパンフレットに掲載の歌）

「白波が幾重にも打ち寄せてくる住吉の岸の黄土に衣を染めて行きたい」

聖武天皇の難波行幸に従駕した車持朝臣千年が住吉の浜を讃えて詠んだ歌。「黄土（はにふ）」は文字通り黄色い土で、この当時、

住吉の岸辺周辺などで出土する黄色の粘土で衣を染める鉱物染めが有名であったよう。

あられ 霰打つ あられ松原 住吉の弟日娘と 見れど 飽かぬかも

——長皇子（ながのみこ）の御歌 卷一（住之江区安立町）

「あられの降るあられ松原を住吉の弟日娘といっしょに見れば飽きないものだなあ」

長皇子は天武天皇の皇子で、弓削皇子の同母兄弟の兄。「あられ松原」は現在の住之江区安立町との説、「弟日娘」は住吉にいた遊女か、この時代の遊女は地方を訪れた官人などをもてなすために歌などの教養にも優れた女性が多かった。

■古今集

わが背子が 来べき宵なり ささがにの 蜘蛛のふるまひ かねてしるしも

衣通姫（そとおりひめ） 玉津島明神

墨滅歌

「今晩はきつとあの人が来てくれるに違いない。笹の根元で蜘蛛が巣を張っている、今夜はそれがはつきり見えるもの」
衣通姫は日本書紀によれば、容姿絶妙でその美しさは衣を透して輝いたという。允恭天皇に寵愛されたが、皇后の嫉妬を怖れた天皇により河内の茅渟宮に移された。後世、紀伊国歌の浦の玉津島神社に祭られる玉津島姫と同一視され、和歌三神のひとり。

ほのぼのと 明石の浦の 朝霧に 島隠れ行く 舟をしそおもふ

柿本人麻呂

卷九 羈旅歌

「ほんのりと明るんでいく明石の浦の朝霧のなか、島陰に次第に姿を消してゆく舟をしみじみと感慨深く眺める」
歌の調べとしては、先頭の「ほのぼの」での繰り返しが「あかし／あさぎり」と「しまがくれ／しぞ思ふ」によってフォローされ、バランスのとれたかたちとなっている。

住吉と 海人は告ぐとも 長居すな 人忘れ草 生ふといふなり

壬生忠岑

卷一七 雑歌上

『住み良し』と漁師が言っても、長く留まらず早く帰ってきてほしい。住吉の地には、私を忘れてしまふという忘れ草が生えていると聞くから
初句の「すみよし」に地名の「住吉」と「住み良し」がかけであり、三句目の「長居」は地名の「長居（長居の浦）」が織りこまれている。「忘れ草」は住吉という地名に詠みこまれることの多い景物のひとつ。

■新古今集

夜や寒き 衣やうすき 片そぎの 行合ひの間より 霜や置くらむ

夢想 住吉明神 卷一九 神祇

「夜が寒いのか衣が薄いのか、千木の片削ぎの交わっている隙間からもれて霜がおいているのか。住吉さんは朽ちているのだ」

風になびく 富士の煙の 空に消え ゆくへもしらぬ わが思ひかな

西行

卷一七 雑歌中

「風になびく富士の噴煙が空に消えてゆく。その煙と同じように、私の思いもどこに行こうとするのか、行方もわからない」
文治二年（1186）から翌年にかけての「東大寺再建のための砂金勧進の」奥州旅行か。西行法師は、妻子を残して出家をし、生涯流浪の旅を続けた。この歌は、そんな自分と行くあての知れない煙とをかけあわせ、自分自身に問いかけてみた句。

■古今伝授

江戸時代の天皇・公卿→住吉・玉津島に奉納

住吉や 仰ぐ恵の 春立ちて 咲きいでむ花を まつの言の葉

後西天皇

住吉大社奉納和歌集

（寛文四年 後西上皇が後水尾法皇より古今伝授を受けた後、公卿たちとの住吉大社奉納和歌）

■現代和歌

時じく松風の音 すみびびく 西上人のおくつきどころ

佐沢波弦

(昭和13年若山牧水・与謝野晶子編集の『新万葉集』募集歌に入選)
(弘川寺(大阪府南河内郡河南町)の境内に入って右手に歌碑)



佐沢波弦氏と弘川寺の歌碑

幾山河越えさり行かば 寂しさのはてなむ国ぞ 今日も旅ゆく

若山牧水

『海の声』

「これから先、いつたい幾つの山や川を越えて行ったら、寂しさが尽き果ててしまうような国に至るのであるうか。その思いを胸に、今日も旅を続ける」

山のあなたの 空遠く「幸い」住むと人のいう

噫(ああ) われひとと 尋(と) めゆきて 涙さしぐみ かえりきぬ

山のあなたになお遠く「幸い」住むと人のいう

カール・ブッセ(上田 敏/訳)

その子二十櫛にながるる 黒髪のおごれる春の うつくしきかな

与謝野晶子

『みだれ髪』

「その人は今、二十歳。髪をとかせば櫛に流れるようにゆらぐ黒髪の誇りに満ちた青春の何と美しいことよ」

□参考文献

光田和伸 「十五・十六世紀の文学 連歌の流れ」 岩波講座日本文学史 六 平成8年

↓和歌の発生について、歌垣について

廣木一人・松本麻子・山本啓介『文芸会席作法書集』 風間書房 平成20年

↓江戸時代以前、一般に行われていた歌会の作法

鶴崎裕雄「古今伝授」国文学研究資料館編『古典籍研究ガイド』 笠間書房 平成24年

↓上皇・天皇古今伝授後の住吉大社奉納和歌

参考

短歌・俳句の募集について 歌神の住吉大社では神事に奉納する作品を募集しています。

歌神の住吉大社

住吉大社は、万葉の時代より歌枕として、数多く和歌に詠まれてきた名所であり、「和歌の守護神」として広く親しまれ、祈りを込めて和歌を奉納してきました。
この伝統によって、住吉大社では毎年短歌・俳句にちなむ神事を行っております。

■新年献詠祭（一月十五日）

募集 短歌 詠題 自由（おひとり二首まで） 神前にふさわしい内容で、自作・未発表に限る

（締切 十一月末日）

選者 安田純生・佐沢邦子・香川ヒサ

■松苗神事（四月 三日）

募集 俳句 詠題 自由（おひとり二句まで） 神前にふさわしい内容で、自作・未発表に限る

（締切 二月末日）

選者 藤井富美子・古賀しづれ・大橋 暁・森田純一郎・小杉伸一路

■観月祭（中秋の名月）

募集 短歌 俳句 詠題 自由（おひとり二首・二句まで） 神前にふさわしい内容で、自作・未発表に限る

（締切 七月末日）

選者 「短歌」 安田純生・佐沢邦子・香川ヒサ

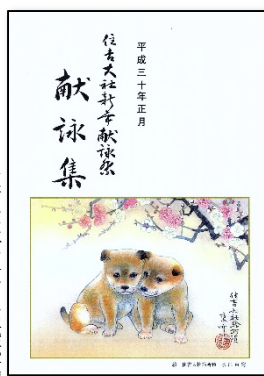
「俳句」 藤井富美子・古賀しづれ・大橋 暁・森田純一郎・小杉伸一路

【作品応募の宛先 及び「注意」いただきたい点】

〒五五八―〇〇四五 大阪市住吉区住吉二一九―八九 住吉大社献詠係

電話 〇六―六六七二―〇七五三（代表）

楷書で、住所・氏名（本名・号）・年令・郵便番号・電話番号を明記のこと。



住吉大社発行／表紙転載



住吉大社発行／表紙転載



住吉大社発行／表紙転載